

2019
9.28
SUN

くまもとアートポリス こども建築塾 2019 — 虫の家 —

開催場所 | 熊本市立青年会館
講師 | 平田 晃久 (建築家、京都大学教授)
参加児童 | 19人
ボランティアスタッフ | 学生 (崇城大学、有明工業高等専門学校)、
県職員



講師 平田 晃久氏

「もし虫になったら、どんな家がいいか」。
虫の生態などを調べて虫の視点にたった
建築空間づくりをテーマに開かれた「こども建築塾 2019」。
小学4年生から6年生までの19人が会場に集まり、
自分が選んだ虫になりきって、虫の家の模型づくりにチャレンジした。



虫の気持ちになって 建築空間を工夫する

京都大学教授で建築家の平田晃久 (あきひさ) 氏が今回のこども建築塾の講師。テーマとして掲げたのが「虫の家」。それぞれにあらかじめ好きな虫を選んで、その虫の生態を調べ、虫の動きや食べるもの、からだのつくりなどを考えながら、虫になりきった建築空間の模型制作に取り組んだ。平田氏から自身の近作を例に「建築空間づくりの視点」を学び、「虫の気持ちになって考えよう」というアドバイスのもとに、子どもたちは5つのグループに分かれ、木の枝や葉っぱ、色紙、セロファンなど、自宅から持ち寄った材料を使いながら、自由な発想で虫の家づくりに熱中した。

ひとつとして同じ家はない、 個性豊かな虫の家が完成

アゲハチョウやクワガタ、テントウムシ、トンボ、カマキリなどなど、子どもたちが選んだ虫は多種多様。中には「みじめなトカゲ」といった、虫に性格づけをしたユニークなテーマもあった。事前に考えてきた計画通りに制作を進める子や、作りながら要素を加えていく子など、思い思いに虫の気持ちになった家づくりに没頭した。完成したものは同じ虫をテーマにしたものもあったが、それぞれに全く視点が違う個性豊かな家が並んだ。「空間の中をぐるぐるチョウチョがまわるようにした」「まっすぐしか飛べないトンボの動きを考えた」「アリさんが楽しめる家にした」「クモの巣をボンドでつ

くった」など、工夫した点を発表。平田氏は「それぞれの素質がつくるものに表れている。この中から建築をやりたい人が出てくるのが楽しみ」と締めくくった。

子どもたちの感想

自分が虫になったらというのを考えるのが楽しかったです。(小6)

自分の思うようにはいかなかったけど、とてもいいのが完成しました。(小5)

部屋を作るのが楽しかった。(小4)